

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 0839 221218



会報

松 門



松 陰 雑 感

松風会理事 山 本 重 治

先日、全く素人の社会人の小さな集いで、松陰の名前が出たので、彼について何か承知していることをあげてみてくれな

いかと申したところ、二十代の女性「勉強のできた人……」、四十代の女性「外国へ行った人がった人……」、熟年の男性は「性格のきびしい人……」と答え、さらに「西郷隆盛や坂本龍馬などは、テレビでどんな人かわかるが、松陰は、どうしてテレビに出ないのだろうか……」と付け加えた。

それぞれに関心を示し、松陰の一斑に触れていたもので、一応賛意を表し、私見をのべておいたのであるが、学校教育を含め一般社会人のために、彼の人間と活動のあとを、改めて考えてみるのもよいのではないかと、虚をつかれた思いがした。

そこで、江戸末期の激動する時代に生きた松陰三十年の人間像と行動の軌跡を考えながら、

と思う。

現代の形は違うが、同じような揺れ動く国際社会のなかで生きているわれわれは、彼をどのように捉え、どのように理解し、どのように受けとめたらよいか、年齢、性別、学校、社会での生きざま等によってまちまちであると思うが、一応雑感としてのべてみたいと思う。

歴史上の人物の評価を考える場合、人により、時代により変化があるのは当然のことながら、主観や時流に片寄りすぎると、時代が変わったとき、困ったことになりかねない。

●松陰の人間像

明治、大正、昭和の史家、徳富蘇峰でさえも、その名著「吉田松陰」の明治二十六年の初版が「平民主義」の立場に立つのに対し、明治四十一年の改版が、日清戦争を境として展開されはじめた「国家膨張主義」の立場に立ち（植手通有解説）、その傾向が一般的に昭和の戦前まで及んだことは、現代の国際感覚から考

●勉強第一、座学と遊学

豊かな読書と表現力、「孟子」と遊学による自己啓発教育者としての松陰

●相手の個性を見抜いた愛の指導と、その成熟への期待

人間平等、民生第一

封建制のなごしい身分制度

えれば、考慮の余地があり、そのため戦後の松陰論が、どこか生彩を欠いていないのではな

下に貫いた四民平等主義
●開明論者としての進歩的感覚
外国を知って自国を考えようとした下田踏海、江戸と京都に外人講師招へいによる大学創設等みる進歩的情熱

●尊王攘夷論

激しい攘夷論は、將軍継嗣と条約違勅調印後のことで、それが維新を実現させたが、それ以前は、国防、海外知識の吸収による幕藩政治、対外政策の改善にあったことに留意していながら、松陰が維新の中核として、他県でも関心もたれ、松陰の東北遊歴に関連した青森県内の「歴史の道整備促進運動」、秋田県大館市の篤志家による「模範松村塾」の建設、また維新の一翼を担った高知県においても、民間有志によって社団法人「考える村」が設立され、中央施設「考堂」内の「先哲の間」の掲額には、松陰も世界の先哲二十名のなかに加えられ、その業績を学び、自己を考える求道施設として一般に解放されている。

本県においても「松陰の道」等、松陰精神顕揚の計画があるのは、当然のこととはいえ、喜ばしいことである。

松陰の求めた道を今に求める

県内「松陰の道」調査実施に御協力を

山口県教育会
松 風 会

臨教審の答申を受けて国民的課題としての教育改革推進が次第に具体化しつつあるとき、その根本の問題は「心の教育」であり、教育精神の高揚であるとの認識に立ち、特に本県においては吉田松陰先生の教学精神の顕揚、普及をはかることが緊要な課題であると考ええる。

そのための一つの方法として松陰先生が県内を巡視、探索された道を再確認し、これを「松陰の道」として修復整備し、青少年の歩行鍛練にまた一般県民の意識高揚、体力増強の場に活用していただく事業を計画し、前号でも紹介したところである。すでに青森県にあっては松陰先生が嘉永五年（一八五二年）に国防視察も兼ねて東北諸国を遊歴された道筋を丹念に調査し、「歴史の道—松陰道」として修復整備し、毎年これを歩行踏破する行事を県外にも呼びかけ、大々的に実施していることも紹介されたとおりである。

案内図を見れば極めて詳細なところまで東北遊日記と照合して表示され、要所要所には説明板、記念碑等が建立され、歩行者の感興をわかせるような配慮がなされている。

東北にあってこれほどまでに松陰先生が敬慕されていることは一種の驚異である。

本県において萩—山口間の旧街道が「歴史の道」として整備されたことはまことに喜ばしいことであるが、この外にも松陰先生は広く県内を歩いておられる。これらの道筋が明らかとなり、道筋の箇所箇所における松陰先生の動静が判明し、ここを歩行する者が当時の先生と同じ感懐にひたることであれば、さだめし感慨深い散策にもなるであろう。

その思いを更に深めて松陰精神の真髓に触れ、自らの「生き方」に何かの啓発を受けるところがあれば、一石何鳥もの有益となるであろう。

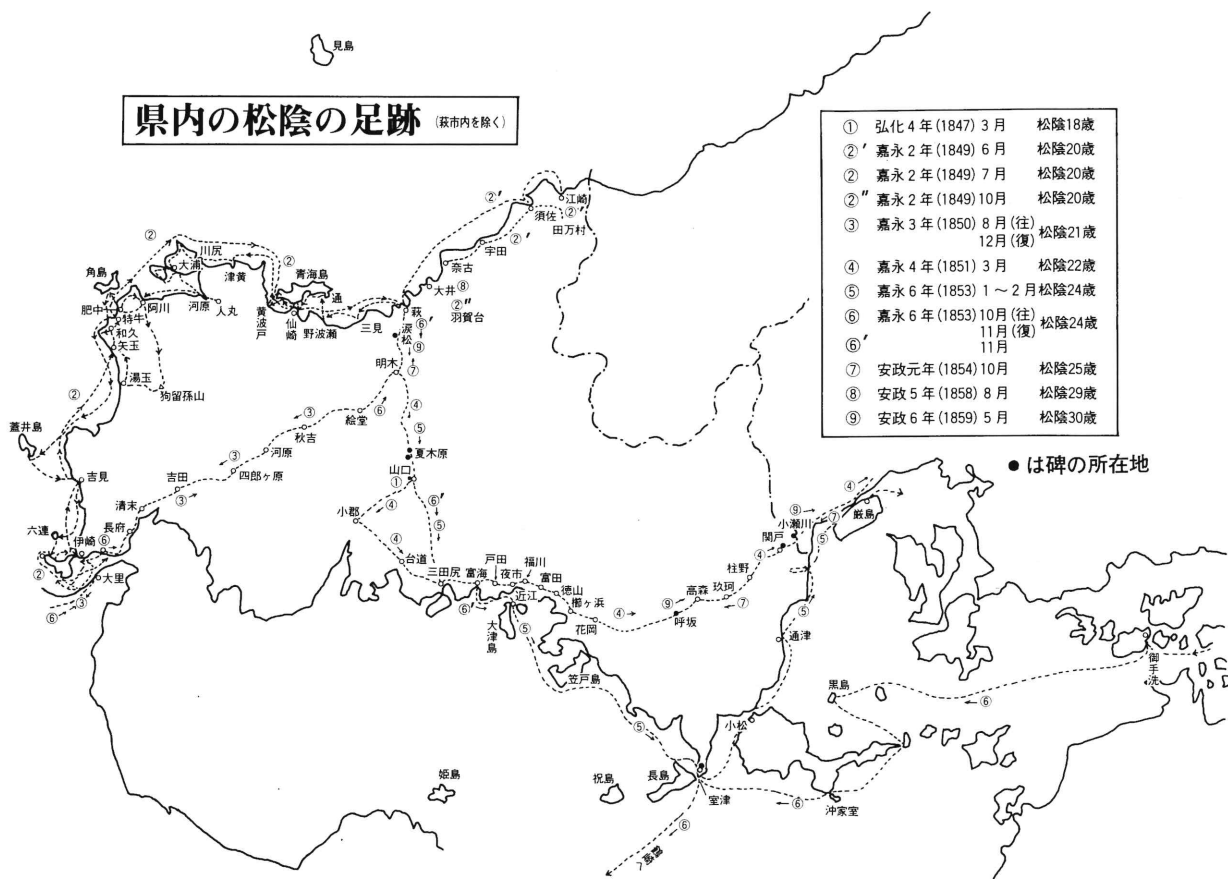
ここに着目して松陰先生が歩行された県内の道を吉田松陰全集に掲載されている「廻浦紀略」「西遊日記」「東遊日記」「癸丑遊歴日録」「長崎紀行」「涙松集」「縛吾集」等からひろって見ると次の図のような道筋が浮かび上がって来る。当時の人としてまた短期間にこれほど県内を踏破しておられることは驚きである。さらに県外（青森から長崎、熊本に至る間）の遊歴飛翔の行動に至っては驚嘆の外はない。

これら県内の道程を前述の諸資料等によって実地検証する作業から着手することとしている。そのためには、専門的な知識、よりどころとすべき文献資料、それに基づいての調査要員等諸条件を整えて取り組まねばならないことは論をまたない。

そこで県内各大学の専門の先生を始め歴史研究、松陰研究の方々により次の分担区分で作業を進めていただくこととなった。

「松陰の道」調査分担表

地 域	企画委員	文献調査委員	事務局員	現 地 調 査 委 員
田 万 川 町～萩 市 (江崎)	井町 新熊 (山口県教育会理事)	国守 進 (山口女子大学教授)	市原 馨 (山口県教育会主事)	齊藤博英 松尾 龍 小野員稔 近藤隆彦 樋口尚樹 (田万川町) (須佐町) (萩市) (萩市)
三 隅 町～豊 浦 町	岩本 肇 (山口県教育会理事)	川村 博忠 (山口大学教授)	松重 博人 (山口県教育会主事)	福江芳明 光田英一 世良武 西中資良 村田菊雄 伊藤忠芳 内山貞子 網田弥一 (三隅町) (長 門 市) (日置町) (油谷町) (豊 北 町) (豊浦町)
萩 市～山口 市	小川 國治 (山口大学教授)	小川 國治 (山口大学教授)	大田 恭次 (山口県教育会専務理事) 谷口不二彦 (松風会事務局長)	川口雅昭 磯部洋一郎 伊藤敦夫 市川利明 泉信太郎 奥 健策 貞升浩二 (高校松陰研究会)
旭 村～美祢市 (明木)	三輪 稔夫 (山口県教育会理事)	田中 誠二 (山口大学助教授)	齊藤 真文 (山口県教育会主事)	上田重治 吉永保義 阿武孝太郎 木島俊太郎 岩野和夫 阿座上正昭 (旭村) (美東町) (秋 芳 町) (美 祢 市)
下 関 市	多賀 三郎 (下関市教育長)	日野 緩彦 (宇部短期大学教授)	山根 喜弑 (山口県教育会主事)	見好 豊 清永只夫 中嶋幸夫 前田博司 (下 関 市)
山口～大内～防府	河村 太市 (山口女子大学教授)	小川 國治 (山口大学教授)	福田 徳三 (山口県教育会主事)	原田岩男 原 祥文 吉野秀一 (山口市小鯖) (山口市大内)
山口～小郡～防府	河村 太市 (山口女子大学教授)	川村 博忠 (山口大学教授)	山根 喜弑 (山口県教育会主事)	武重 久 (小郡町)
防 府 市 内	臼杵 華臣 (防府市毛利報公会展覧館長)		陶山 長 (山口県教育会事務局長)	脇 正典 水田耕作 (防 府 市)
新南陽市～熊毛町	山中 鉄三 (徳山大学教授)		大村 賢治 (山口県教育会主事)	清水 素 瀬島 肇 玉野知之 藤井 修 (新南陽市 徳山市 熊毛町)
周 東 町～和 木 町	河村 正人 (周東町教育長)	宮田伊津美 (岩国徴古館学芸係長)	河村 希雄 (山口県教育会主事)	山本哲生 平田光寛 内田陽久 山口修己 折本 章 中村良雄 (周 東 町) (玖 珂 町) (岩 国 市)
瀬 戸 内	河村 正人 (周東町教育長)	三浦 肇 (山口大学教授)	河村 希雄 (山口県教育会主事)	福本幸夫 梅本節治 瀬川芳昭 河井正行 (柳井市) (柳井市) (平生町) (大島町)



県内「松陰の道」調査計画

第一次調査(文獻調査)

当時の道筋の確認と関連付属資料の収集

1. 御両国測量絵図

2. 海岸要津浅深台場絵図

3. 長門船着浦ヨリ萩城下迄里数絵図

4. 海岸村別里数浅深絵図

5. 伊能忠敬日記外

6. 吉田松陰全集その他

7. 文獻調査資料により分担区分の現地確認の調査、変遷及び現状の把握

8. 道筋の確認、変遷現状の把握

9. 松陰宿泊、休憩地、詩碑等の確認

10. かかわりの人物、詩文確認

11. 逸話、言い伝え等松陰に係する事象の採集

第二次調査(現地調査)

12. 「松陰の道」修復整備の課題

13. 歩いた日時、目的、当時の松陰の身分、活動情況

14. 藩や国(幕府)の情況

15. 道筋の略図

16. 地名、その他必要事項記入

4. 道筋の情況

・行動順に地点(区間)について資料、写真等により現状と対比しつつ説明

・宿泊、休憩地、詩歌、かかわりの人物等について解説

・道筋に残る逸話、言い伝え等も付記

・全体を通して行動する松陰像を浮彫りにするとともに松陰の感懐を再生

・「松陰の道」修復、活用に関する具体策提案

以上の構想をもって調査を実施し、興味深い報告書(案内書)を作成することを計画している。

従って単なる道の案内書ではなく、行動する松陰像を浮彫りにし、先生が求めた道を現代に甦らし、われわれのこれからの「生きる道」の指針を探索していかうとするものである。

願わくは、大方の皆様のご共鳴をいただき、進んで現地調査に加わり、あるいは関係資料のご提供をいただくならば、まことに幸甚である。

あわせて調査終了の後に「道」の修復整備について各界各層の御協力と行政当局の格別の御支援を切望してやまない。

松陰の足跡をたずねて⑦

平戸―長崎―熊本 和木中学校 折本章

九州遊歴の目的

西遊は松陰にとって初めての遍歴である。それは嘉永三年松陰二十一歳の旅立ちであった。

これまで家郷に在って学問・教育に没頭していた松陰が、九州への旅を思い立ったのはどうしてであろうか。直接的には、山鹿流軍学者葉山佐内や同宗家山鹿万助などの教えを受けようと考えたからであろう。また、間

接的には、家郷では満たすことのできない精神面の進展、拡充を図ろうとしたためであり、外国との交流の唯一の窓口である長崎の地形や外国艦船を実際に見ることによって対外策を学ぼうと考えたからであろう。

西遊日記の序には、

「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり。機なるものは触に従いて発し、感に遇いて動く、発動の機は周遊の益なり」と、記されている。

先達・古人の業績に直に触れそのすばらしさに感動して人の

心は奮起され、精神の進展・拡充を図るものであろう。

松陰は「人の病は思わざるのみ」と喝破し、人格陶冶において「思うこと・学ぶこと」を非常に重視した。遊歴は人を思考場面に誘い込み、机上の学問の足りないものを補ってくれる。遊歴は松陰にとって真に生きた学問であった。

私達は松陰のこうした思いを心の奥底に留めながら、松陰が百三十六年前に歩んだ路を辿った。風清い秋空のもと、博多から急行みどりに乗り継ぎ佐世保に至る。ここからバスで鹿子前港に、さらに高速艇に乗りかえ海路を平戸に向かう。

松陰は九月十四日の西遊日記に「舟行一里にして平戸城下に

至る。この間瀬戸にして水勢の迅疾、赤間関よりも甚だし」と記している。松陰は江向(日野浦)より平戸(舟行一里)に渡り、五十余日逗留の後、船で時津に向かっている。従って、私達の進路は松陰の進路を逆方向

に辿ったことになる。平戸港で下船して市役所を訪れ、萩原博文氏のご案内で市内の関係史跡を巡る。時既に四時前。

葉山佐内旧宅跡

市役所から二キロ位進んだところで佐内旧宅に通じる小さな山道に差し掛った。それを数分登ると山中に一軒屋があった。これが佐内旧宅跡である。山道や旧宅の周辺には、人家は一軒もなくただ草木の繁るだけである。正に樹木の中に家ありといった感じで、敦篤朴実な老学者佐内に誠に相応しい幽境である。



葉山佐内旧宅跡

玄関の表札には、林武雄と記されているが、家中には全く人氣がない。佐内は平戸藩家老で陽明学を好んだ。松陰はここで王陽明の『伝習録』を読んで知

行合一の哲学に共感し、「後巻を釈すること能わず」と記している。

松陰は佐内の著した『辺備摘案』を書き写し、戯れに評を書いて

老師にみせた。すると老師は私の心と深く響

き合うので、自分の稿本にもその評を書いて欲しいと懇願した。また、佐内は「吉田寅次郎は若い優れた人物。文章もよく書ける」と松陰を称えている。

松陰宿泊紙屋跡

松陰は平戸に着いてあちこちに宿を求めたが、みな断わられた。その間のようすが九月十四日の日記に次のように記されている。「浦の町に至りて旅館を求むるに皆辞す。因って直ちに葉山佐内先生の宅に至り拝謁し其の命に因りて紙屋というに宿す」と。

松陰は平戸に滞在中ここに宿し、ここから老師宅に足を運び教えを受けた。現在は「田原石碑店」という看板が掛けられ、石碑業を営んでおられるようである。道路に面した当家の前に「吉田松陰宿泊紙屋跡」と刻まれた細長い石碑を発見したとき



吉田松陰宿泊紙屋跡

には、在りし日の松陰の行動的な姿が彷彿され、感激して胸の中が熱くなるような思いであった。正に「発動の機は周遊の益なり」である。

積徳堂跡

山鹿流兵学の始祖山鹿素行は松浦二十九代天祥公鎮信の庇護を受けながら、江戸浅草に「積徳堂」という扁額を掲げ家塾の号として多くの子弟を教育していた。その嫡子高基も松浦侯から大変な恩顧を受けながらも江戸に留まり、松浦侯に仕えようとはしなかった。

その期待を受け入れ、初めて平戸に赴いたのは三代目つまり素行の孫にあたる高道である。高道は一七四四年、平戸に積徳堂を移して松浦侯に仕え、この地に定住した。こうして山鹿流学問の正統が代々平戸に伝えられるようになった。

松陰は五十余日間平戸に逗留して宗家の教えを受けている。

そのときの松陰の起請文や誓詞血判が今も宗家に残されている。山鹿家の門を叩くと、温厚そうな女性が現われた。十四代山鹿高清氏夫人である。山鹿家について懇切丁寧に説明してくれた。尊父光世氏は平戸市長を務め、市民の信望誠に厚く、後に平戸市名誉市民となり、遺影が市役所に飾られている。



積 徳 堂 跡

松浦史料博物館

ここは松浦氏発祥の地であり松浦藩主邸跡でもある。寛政四年に作成された館内展示の平戸古地図に「紙屋政之助問屋紙類商売」なる文字を発見し思わず歓声を発した。葉山佐内邸も探してみたが発見できなかった。

長 崎

平戸から急行で長崎へ、市教委米村氏の案内で崇福寺（松陰はこの裏山から長崎の形勢を展望した）、高島秋帆旧宅跡（松陰は秋帆の子浅五郎を数度訪問した）、長州藩屋敷跡、出島跡等を見学して宿に着く。長崎は松陰にとっては、嘉永三年九月に七日間、十一月に二十四日間、嘉永六年十月に六日間滞在の因縁の深い地である。特に最後の場合は露艦を目ざしたのに出航後となり、痛恨、断腸の思いであったであろうと追想する。

清 正 公 廟

構内タクシー運転手森崎洋三氏は史跡に詳しく、清正公について多くのことを語ってくださり学ぶ点が多々あった。廟からは熊本城が一望でき、清正公の霊魂が熊本城を見守っているかのような感じがする。尤もこれは公の遺言であったようだ。廟は誠に華麗であるが、その中にも厳然たる趣がある。

十二月十二日、寒気厳しい月明かりの夜、松陰はこっそりと宿を抜け出し高い石段を登って清正公に詣った。六歳の弟敏三

郎の啞が治るよう祈願するためである。神仏への祈願など元来



清 正 公 廟

松陰の好んで為すべきことではない。平戸で王陽明の年譜に「先生五歳にして未だ言わず、これより先き雲と名づく。今の名に改むるに及び、即ち能く言う云々」とあるのを読んだことが参詣のきっかけとなったのであろう。いずれにせよ、人事を尽くした後の肉身の情として、祈らずにはおられなかった松陰の心中察するに余りある。

宮部鼎蔵邸址

熊本市内坪井に「贈正四位宮部鼎蔵先生邸址」と刻まれた大きな石碑がどっしりと建っている。しかし、この碑に目を止め、宮部鼎蔵の名を求めて来訪する者は数少ないという。私達松門

の訪れを心から歓迎し歓待してくれたに相違ない。

宮部は一八二〇年肥後の国田代の医家に生まれた。しかし、その業を継ぐことを欲せず、伯父について山鹿流兵学を修め、遂にその養子となった。後に田城塾を開き、肥後勤王五党の総帥として藩士の指導にあたった。宮部は松陰の無二の親友であり、肝胆相照らす仲であった。二人の關係は九州遊歴の復路にその端を発し、東北旅行を経、

下田踏海に至ってその極に達したとみることができよう。宮部を「宮部鼎蔵は毅然たる武士なり。僕常に以て及ばずと為し、毎々往来して資益あるを覚ゆ」と評していることから、松陰が如何に宮部を崇拜していたかを窺い知ることができる。

宮部は幼少より実家と養家の

とを考え、「忠孝」でなく「孝忠」だと唱えたほどである。宮部の娘が、「寅しゃんの来て又黒砂糖ば食いよらす」と話したという。謹厳実直な印象のある松陰にはそぐわぬ話と思われるかもしれないが、兄との手紙の遣り取りなどを思えば、有り得ないことではなからう。また、それだけ宮部に親近感を抱いていた証とも考えられよう。

横井小楠生誕地

宮部邸から二百米の隔たりもない熊本中央女子高校の敷地内に「横井小楠先生生誕の地」と書かれた標柱が立っている。校内に産湯の跡もあったが、今はよくわからないようであった。松陰は実学党と呼ばれた小楠の教育論に傾倒し、これを長州藩にも取り入れようと考えた。

松陰が非常に高く評価した人物である。



宮 部 邸 址 の 碑

発熱のため松陰が数日滞在した柳川を経由したが、そこに足跡一つ発見できなかった。これから一

四人の親によく仕え、篤孝により藩賞を受けたこと三度に及ぶという。家あって後、国おさま先達諸氏に深謝し、筆を置く。

○はじめに

私が魂の教育者吉田松陰先生に心をひかれ始めたのは今を去る五十年前、教職生活三年目の昭和十三年秋の頃であった。当時は松陰に関する図書を古本屋などで買いあさってはただ乱読していたに過ぎなかった。しかし、その後玖村敏雄先生著の「吉田松陰」にめぐり合ってから、私はこれをもって私の教育道の柱としてひたすらに

○松陰の心を求めて

私は昭和五十一年三月、人吉市立第一中学校を最後に四十年の教職生活を去った。その時、私の最も敬仰してやまない郷土出身の教育者、元人吉市教育長阪田貞雄先生（現在九十一歳）から退職記念として一冊の本を賜った。即ち昭和十七年、岩波書店発行による玖村敏雄著「吉田松陰の思想と教育」という本がそれである。同時に私は山口

松陰の心を求めて

吉澤 典雄

(元人吉市立第一中学校長)



斯の道に専念することにした。しかも、四十年間の教育生活にあつて忘れ難い思い出の一つに、三十年という短い生涯を燃えつくされた松陰先生のその同じ三十歳時に私はたまたま召集をうけ、その召集時に一冊の本を持って出かけた。その本がその「吉田松陰」でもあった。戦後四十三年の今、あらためて燃えていた青年教師のよき時代を思い感懐無量なるものを覚える。

県教育会篇の「吉田松陰全集」全十巻を購入し、松陰研究による第三の人生を踏み出した。思えば、いつの世にあつても「教育は国家百年の大計であり教育は人にある」そこで私は感ずるところあつて、郷土の心ある青年教師たちに呼びかけて「松陰研究の会」なるものを発足することにした。退職後間もない頃のことである。そして昭和五十七年八月二十四・二十五日には、近くの宮崎

県霧島に籠りその一連の教師たち「松陰の心とのめぐりあい」と題して講義をし、日本の教育について論じ合う夜を過した。その後、昭和五十九年一月十八日、雪の夜、第一回松陰研究の会を私宅の如是庵で開いた。

また、昭和六十一年三月十七日、私は会員の求めにより、松陰先生の語録から「涵育薫陶」「悠々天地事、鑑照在明神」「学真武真文、修身正心、治国平天下、是士道也」などを座右銘として色紙に認め会員一人ひとりに贈り相俱に松陰の心を求めて

であった。この本は松陰自身の生々しい文とあつて漢文の素養なくしては意の如くならず、その解釈もまた難を極めその輪読会は遅々として進まなかった。しかし、それだけに求めんとしている松陰の心は身に深く刻みこまれていくものがあつた。

私は、松陰研究を更に深めるために松陰の祥月命日である十月二十七日を中心に第四回目の萩の旅に出かけた。その時は私の教え子であり、五十年間近く教育の道を共にしてきた前人吉東小学校長、浜敏夫先生（現人



萩の旅
一松陰の心を求めて一
吉市教育長
も同行され、国民宿舎萩浦荘の二夜を松陰と教育について語り明かしたものであ

○おわりに
私たち松陰研究の会は、その第一歩を踏み出したに過ぎない。「源は深く、流れは遠し」真の松陰の心を求めんとすれば今後に果てしない道がひろがっていくことであらう。



ある日の松陰研究の会 一輪読会一

金子重之助は天保二年（一八一三）正月四日に生まれ、幼名を卯之助、後に貞吉また重之助と改めた。金子家は萩に隣接する渋木村（阿武郡福栄村紫福）の出身で、父茂左衛門は萩城下津守町で染物業を営んでいた。

九歳の時、松陰と親交のあった白井小助に師事し、長ずるに及び松陰の盟友土屋蕭海の私塾に学んだともいわれている。家業をいとい同姓金子繁之助の養子となり、久芳内記組下の足軽として毛利家に仕えた。

その後、酒色の失敗があり、大いに悔悟、奮起して嘉永六年二十三歳の時、白井、土屋両師のいる江戸の毛利藩邸に出役した。そして、両師が出入りしている鳥山新三郎の私塾に学び、多くの憂国の志士と交わる機会をえ、松陰との出会いをえた。

松陰は重之助との出会いについて、

「九月（嘉永六年）、余、策を決して西行す。時に余未だ重輔と相識らず。重輔、吾が友永鳥三平と遊び、其の議論を喜ぶ。余が西行すあらんとするを知り、奮って余を蹴はんと欲せしも未だ果さず。余、西のかた長崎に至り策を得ず、十二月再び

江戸に入る。始めて重輔を見、具さに語るに志を以てす。重輔大いに悦ぶ」と。

重之助の人となりについては「屑々たる（弱々しい）小丈夫のみ、然れども其の眼彩爛々として不屈の色あり」「其の一種勇往果敢の気、勃々として人に逼る」と。

なお、重之助は、松陰の国を救おうとする大志を永鳥氏から聞くや、自分もぜひ松陰と行動を共にしよう

と決意し、藩に迷惑のかからぬように藩邸を亡命して

松陰は重之助のこの気節に感じ、志を同じくするに至る。重之助は、直ちに松陰に学問の指導を仰ぎ、まず地誌を猛然と学び始めた。松陰の門人第一号である。

安政元年三月三日、幕府が神奈川条約（日米和親条約）を締

松陰をめぐる人びと(6)

金子重之助 萩市 松田輝夫

結調印するに至り、重之助は「速かに前策を果すべし」と松陰を促し、二人は踏海決行のため五日江戸を出発した。松陰は重之助について「事を謀るや、勇鋭力前、率ね常に余を起す」と。重之助の存在が大きかったことが知れる。

計画は難行し、ついに二十七日深夜、下田踏海の挙を決行したが、不幸にして事敗れ、自首して捕えられ、四月十五日江戸伝馬町の獄につながれた。重之助は不運にも発病し、重病の状態で九月下旬江戸から松陰と共に萩へ送監された。途中、護吏甚だ無情、松陰は身をていして重之助をかばい続けたが、重之助の病状は悪化へと向った。

「幸に生前一たび父母を拝して然る後に長眠せば、万々憾みなきなり」重之助の望みはかなえられたが、「吾が命竭きなん。然りと雖も天下の事は吾れ敢へて忘れざらんのみ」といい残して、安政二年正月十一日、二十五歳の若き命を燃焼した。松陰のいた野山獄から道一つ隔てた岩倉獄において

であった。

重之助は、踏海決行のため江戸を発し縛につくまでの記録を大日本無二遊生と署名して記述していたが、幕吏の手により不明となる。大変惜しまれている。松陰の重之助への思いは、幽囚録に「金子重輔行状」の項を起こして詳述する外、他に数篇を著述し、また、天下の知友にげきして死を弔う詩歌を募り、二年余をかけて、「冤魂慰草」を編集し、その霊を慰めた。更に、獄中の食費を節約し、墓碑建立の資にと「金一〇〇足」を遺族に贈った。それは、墓前石造花筒一對「寄附吉田氏」と刻まれ現存している。（写真）

「彼の重輔は特だ一軽卒のみ而して憂国の念なほ能くここに至る。其の忠義、豈に称すべからざらんや」（「冤魂慰草」より）松陰の盟友口羽徳祐一

明治四十四年正五位を贈られて、



金子重之助の墓

事務局通信

本年度主要事業計画

- ・会報「松門」発行・配布
- ・吉田松陰研究講座の開設
- ・生涯教育センターと共催
- ・下十一か所（六月～十月）
- ・第四回松陰教学研究会開催
- ・第十回吉田松陰輪読会共催
- ・「松陰の道」調査の推進
- ・研究団体への助成
- ・松陰先生関係図書・資料購入
- ・研究資料の斡旋・販売
- ・東送之碑色紙 一部四百円
- ・松陰教学シリーズⅡ 吉田松陰の甦る道（上）一部五百円

本年度役職員名簿

- | | |
|---------|-------------|
| 理事長 | 松永 祥甫 |
| 理事 | 二木 秀夫 山本 重治 |
| | 三輪 稔夫 大田 恭次 |
| | 岩本 肇 志賀 光雄 |
| 理事・事務局長 | 谷口不二彦 |
| 監事 | 陶山 長 藤沢 菊治 |

松陰研究家であり永年本会の理事として研修関係担当、「松門」の編集者でもあった石川 稔氏が七月一日逝去されました。生前のご愛顧を感謝いたします。

資料展示室

吉田松陰先生関係図書 (つづき)

・松陰とその門下 高橋淡水 現代社 大11

・吉田松陰 中里介山 春秋社

松柏館 昭18

・山口の先人たち 河村太市監修 光文書院 昭61

・小説吉田松陰 人間の旗 上下 大林しげる 潮出版社 昭62

・吉田松陰ザ語録 森友幸照 中経出版 昭63

・吉田松陰 ハイニンリッヒ・デュモリン 南窓社 昭63

・その他 (つづき)

・庭訓往来

・書道写真集 本願寺内事局

・類題和歌月波集 上下 近藤芳樹編 山口取珍堂蔵

・戦国武将としての吉川元春

・瀬川秀雄 軍事史研究第二卷

・長周叢書 山田原欽先生事蹟 村田峯次郎 稲垣常三郎 明23

・虚舟遺稿上下 落合濟三 落合兼文 明24

・前哲六無斎遺草 伊勢斎助編 仙台叢書 明28

・維新資料望東禅尼伝 江島茂逸 明29

・大村益次郎先生事蹟 村田峰次郎 大8

・会 昭8

・大楠公 大楠公六百年大祭奉賛会 昭10

・新萩案内 香川政一 含英書院 昭11

・河内信朝先生小伝 作間鴻東蔵重哲三 昭11

・皇政復古七十年記念山口史蹟概覽 作間久吉 山口市役所 昭11

・三典歌 山口県立山口博物館 昭13

・山田原欽 安藤紀一 明倫同窓会 昭15

・防府史料第一輯 三田尻宰判孝義録 岡本三右衛門御賞典年譜・稜威神習處遺文 防府郷土史料保存会 昭16

・大村益次郎先生小伝 井上清介 風騷社 昭16

・毛利敬親公勤王伝ノ補正 正統 杉敏介氏講演 昭16・17

・稿本村田清風年譜 山口県教育会 昭18

・夢かぞえ 野村望東尼 磯辺実 文友堂書店 昭18

・野村望東尼 中谷孝雄 三宝書院 昭19

・防府の今昔 三坂圭治編 防府図書館 昭26

・萩の歌人 山本勉弥 萩文化協会 昭32

・明倫小学校百年誌 萩市立明倫小学校同窓会 昭60

・村田清風全集上下 (復刻版) 山口県教育会 マツノ書店 昭60

・前原一誠伝 (復刻版) 妻木忠太 マツノ書店 昭60

・水戸光圀とその餘光 名越時正 水戸史学会 昭60

・文芸春秋「師弟の風景」 大江健三郎 司馬遼太郎対談 文芸春秋 昭60 (谷口)

・吉澤先生は人吉市の方で、他県でありながらこれほどの研究で努力に対し頭がさがる。

・「ゆかりの人びと」は、石川氏が金子重之助を書くとき意欲を燃やしていたが、病が重くなったので、その意を汲んで松田先生にお願いした。

・山本理事の「松陰雑感」は、理事会で強調しておられる持論であり、現代人として努力していきいたいことである。

・「松陰の道」は、本年度教育会・松風会が全力を傾注するもので、案内書作成までこぎつきたい。ご協力を願う。

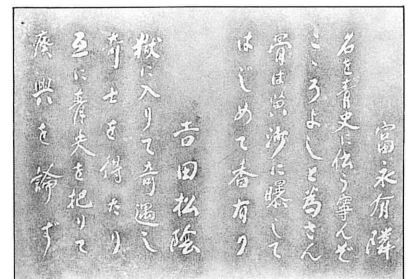
・「足跡をたずねて」は六十一

・年秋実施したもので、無理をいって一回で完結してもらった。

(谷口)



夏木原の絵



田布施町瓜迫農村公園の碑

(編集後記)

・吉澤先生は人吉市の方で、他県でありながらこれほどの研究で努力に対し頭がさがる。

・「ゆかりの人びと」は、石川氏が金子重之助を書くとき意欲を燃やしていたが、病が重くなったので、その意を汲んで松田先生にお願いした。

・山本理事の「松陰雑感」は、理事会で強調しておられる持論であり、現代人として努力していきいたいことである。

・「松陰の道」は、本年度教育会・松風会が全力を傾注するもので、案内書作成までこぎつきたい。ご協力を願う。

・「足跡をたずねて」は六十一

・年秋実施したもので、無理をいって一回で完結してもらった。

(谷口)